

語り継がれる「友情のメダル」。 棒高跳びの銀、銅を分け合う 西田修平と大江季雄のきずな



①銀と銅をつなぎあわせた友情のメダル。西田のメダルは早稲田大学に寄贈された。②世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部を構成する那智の滝。その聖なる水は那智川となり那智浜に注ぐ。③西田は子供の頃、自宅前を流れる那智川のせせらぎでよく遊んでいたという。川間は西田の生家があった辺り。④夏には海水浴客で賑わう那智浜。青い空と海が広がる那智勝浦町の豊かな自然が五輪のアスリートを育んだ。



⑤ベルリン五輪の棒高跳びの表彰式。左から西田、金メダルに輝いた米国のメドウズ、大江。「当時は、金メダルでなければ、勝ったことにならなかった」と西田。そのせいか、日本人2人に笑みはない。この式の後、2人の友情の物語が始まる。⑥ベルリン五輪での西田のダイナミックな跳躍。⑦「忍」の一字を揮毫(きごう)した西田の色紙。率直で飾らない人柄を伝えるような力強い文字が印象的だ。

片側半分が銀、もう半分が銅。2色のメダルが真ん中でピタッとひとつに繋ぎ合わされている。世界にも例を見ないこのメダルは、五輪に出場した2人のアスリートの絆を伝える「友情のメダル」として、今も多くの人に語り継がれている。

ドラマの舞台は1936年、ベルリン五輪の棒高跳び決勝戦。前回ロサンゼルス大会の銀メダリスト西田修平と大江季雄らが出場した。5時間にも及ぶ激戦の末、金メダルに輝いたのは米国のメドウズ。西田と大江は同じ4月25日だったが、先にクリアした西田が銀、大江が銅となった。

すでに銀メダルを持っていた年長の西田は、「記録は同じ」「日本人同士

で争うことはない」と若い大江に銀メダルを譲った。ところが帰国後、経緯を知った大江の兄が「本来はあなたのメダル」と返還を申し出た。双方譲らず、それならと西田の提案で半分ずつ切つて、接着剤で貼り合わせることにした。「次の東京大会では、ぜひ金を」。『友情のメダル』には、先輩の西田から大江への、そんな激励の意味もあつたに違いない。しかし、期待も虚しく、戦争のため東京開催は中止に。翌41年、大江はフィリピンで戦死した。

那智勝浦の自然が育んだアスリート

このメダルの物語は久しく身内の

者しか知らなかったが、大江の遺族が秩父宮記念スポーツ博物館にメダルを寄贈したところから話題に。2人の友情を伝えるエピソードとして、道の教科書や副読本に紹介された。

銀メダルを大江に譲った西田は青い太平洋に面した東牟婁郡那智村(現・那智勝浦町)の医師を営む家庭に生まれた。わんぱくで、山や川が遊び場だった。「あの頃、和歌山の自然に鍛えていたのだいとおかげで今日の私があるのではないかと後年、振り返っている。その後は和歌山市内の旧制和歌山中学校(現桐蔭高等学校)から早稲田大学に進学、在学中にロサンゼルス五輪に出場し、2大会連続の銀に輝いた。引退後は、日本陸上競技

連盟理事長などを歴任、後進の育成に尽力した。こうした功績から88年には那智勝浦町の名誉町民の第1号に選ばれた。記念講演では、「スポーツも人生も大切なことは、ただただ一生懸命やること」と語り、実直な人柄をしのべた。『友情のメダル』については、「あのメダルは、世に出るものではなかった……と言葉少なに語るのみだったという。」

「地元で陸上を志す者にとつて、常に憧れの存在でした」と同町教育委員会(ていむいんかい)の寺本尚史(てらもと しのし)教育次長は語る。多くの人に慕われた西田は1997年、87歳で死去。西田の写真は今も、同町体育文化会館に飾られている。(本文中敬称略)